

私の幼児教育論 V

“保育の基本” (三)

三 保育の基本 (三)

——幼児とのかかわり合いの中で——

(v) ひとりひとりの幼児のことばの中にある感情を受容する

(1)

“先生、早くきて、このボール紙切れないもの”

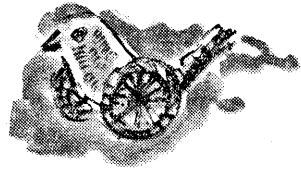
“先生、キリンさんの絵かけたよ、これみてよ”

“先生、ブンブンとこがね虫って、いっしょだね”

“先生、ぼくらの組に入ってよ。リレー負けてばかりいるんだ

もん”

“先生、ごちそうできたから、食べにきてちょうだい”



神 沢 良 輔

“先生、きのう、ぼく動物園へいったんやに”

“先生、わたし、そと(室外へ)いってくるわ”

“先生、○○さん、どこにいるかしらない”

“先生、○○君と××君とけんかしたるに”

“先生、○○ちゃんが、わたしの鉛筆もっていって返してくれ

へんに”

“先生、○○君たち、ぼくを遊びに入れてくれへんに”

幼児たちは、保育者に対して、いろいろな“ことば”による働きかけをする。ここにあげたのはその一例であるが、このような

“ことば”の中には、幼児の保育者への手だすけや参加、承認、

判断、処置などの要求、意志や感情の伝達、報告などという、い

ろいろなことがらを含んでいる。しかし、やはりもっともたいせつなことは、幼児は、それが必ず保育者に「受容」されるものだと思っっていることである。

つまり、幼児は保育者に対して、いろいろな「ことば」による働きかけをするが、その働きかけに対して、大人の間でするように、その「ことば」のもつ内容そのものに対して保育者が反応するというだけで、幼児は満足しない場合がきわめて多いということであり、それは、幼児の「ことば」が、決して表現されたそのままのことではないということでもある。

もちろん、大人どうしの、「ことば」によるコミュニケーションの場合においてすら、その根底に、感情を中心としたコミュニケーションがあるということについては、いまさら言及するまでもないだろうし、また同様に、幼児の使う「ことば」と幼児の認知との関係についても、大人のそれとはきわめて大きな差異があるということがいえる。

(2) そこで、幼児の「ことば」による働きかけについて考えられることを、具体例についてみていくことにする。

たとえば「先生、早くきて、このボール紙切れないもの」とい

う、いちばんはじめに例示した「ことば」に対して、保育者はどのように受けとめ、反応したらよいのだろうか。そこで、まず、これについての見方の例を示してみると、

1 この「ことば」は、保育者に対して、切るのを手伝ってほしいという、要求のようにも思われるし、

2 どのようにして切ったろうまく切れるのかということについての、保育者の判断や処置を求めているようにも思われる。

3 また、ここまではがんばって切ったんだぞということに対して、その努力を保育者に認めてほしいという、要求のようにも思われるし、

4 保育者に、自分のそばで、作業を見守ってほしいということ、ボール紙がうまく切れないということを理由にして、望んでいるようにも思われるのである。

もちろん、ここにあげた他にもいろいろのことが考えられるであろうし、当然そのようではなくてはならないだろう。また、ここにあげた四つの分析の中に適合しているものがあるとしても、そのうちの一つである場合もあるし、それ以上のことが混合している場合だってあるだろう。

このようにみえてくると、幼児の保育者への「ことば」による働きかけに対して、どのように反応したらよいか、保育者としては

本当に迷う場合が多いと思われる。しかし、保育者としては、できるかぎり正しく幼児の“ことば”のもつ意味を分析して理解していくことは、決して悪いことではないし、必要な場合もあると思われる。

そのためには、はじめに記したような、いろいろの幼児の保育者への働きかけの“ことば”を、類型に分けてみていくという方法も考えられよう。また、これらの幼児の“ことば”の中には、なにか類型化していくことも可能のようにも思われるのである。だが、それは、幼児の“ことば”を、なんとなく表面的にみる結果ともなるようにも思われ、ここでは、私はあえて類型に分けることはしなかった。それよりも、もっと幼児の内面の世界で、幼児の“ことば”をうけとめることの方に意味があると思ったからである。

もちろん、幼児のことはを類型に分けて客観的に見ていくことを否定しているわけでは決してない。それは、それなりの必要性はある。だが、保育者として、幼児と接しているということは、幼児自身そのものと保育者との人間的な交渉が、まずその基底にあり、そこから幼児の“ことば”を見ていくことが必要であると思うからである。

(3)

私などのような園長では、幼児からの“ことば”による働きかけに対して自信がもてず、どのように反応してあげたらよいのかについて戸惑うことが多かった。そして結局は、“ボール紙が切れないのね”などというように、幼児のいった“ことば”を、もう一度幼児に返してしまおうということになる場合が多かったし、返したあとでどのようにそれを幼児が受けとめてくれたかを、おそれるおそれる幼児の目や感情の動きに求めて、それでよかったと思ったり、もっと別のいい方があったのではなかったか、などと反省したりするということのくり返しの中で生活していたようである。

でも、実際に幼児を担任している保育者であれば、それが幼児にとつて、どのような意味をもっているかということについての判断や理解は、私などとは異なってもっと正確にできると思われる。しかし、いつも幼児と接している保育者にとつてみれば、このような幼児からの“ことば”による働きかけは、一日をとつてみるだけでも、その交渉の数や量は莫大なものになるであろう。だから、ときには、幼児の“ことば”による働きかけを見落としたり、幼児の感情を無視して、保育者のその場その場の感情で安易に反応したりする場面がみられたりする。幼児が急に保育者

に対して反抗的になったり、乱暴な行動をとったりする場合には、よく前述のようなことが原因になっていることがある。保育中に職員室などによってくる幼児のなかには、ときどき「先生がきらいになったん。先生、ちっともわたしのいうことを聞いてくれないんだもん」などと、悲しそうな顔つきでいつてくる幼児もあるのである。このような幼児には、どのようにしてあげたらいいのか、やはり私などは、ただおろおろするばかりのときが多かった。

(4)

もちろん、幼児は保育者に「ことば」によって働きかける前に、前回までにみてきたように、まず保育者の目を見るだろうし、また、「ことば」によって働きかけるときにもやはり必ずといってよいほど、保育者の目を見ながらするのである。また、保育者との目と目が合わないかぎり、幼児はしゃべることをしない場合が多い。

つまり幼児は「ことば」による保育者との交流をする場合には、保育者の視線の中に含まれている感情を敏感にとらえて、それに対応した「ことば」を保育者に投げかけているといえる。

だから、幼児の「ことば」に対して、保育者がどのように反応

するかは、ひとりひとりの幼児にとって、いろいろな意味で、きわめて重大なことであり、幼児の発達そのものにも、大きなかわりあいがあるということになる。

そのためには、なにはさておき、保育者は、まず、ひとりひとりの幼児の「ことば」による働きかけに対しては、その中に含まれている幼児の感情を、幼児の視線とともに、十分に受容してやるのがたいせつである。というより、ひとりひとりの幼児は、いつでも保育者に、自分が「受容」されるといように思っているのである。また、受容されることによって、安定し、自己を実現していくのである。

つまり、ひとりひとりの幼児が保育者と話し合いたがっているのである。だから保育者はそのような幼児のひとりひとりに対して、常に、話したいという幼児の感情を受容してやる必要があるし、そのようなことできるように、保育の中で心がけることがたいせつである。

(暁学園短期大学)